

て、多項目軸索機能検査法 (Bostock, 1999) により、手根管直上とその 3 cm 近位における軸索興奮性を比較した。手根管直上では、threshold electrotonus の閾値変化の減少、recovery cycle の sopernormality の減少が認められ、膜電位が脱分極側にシフトしていることが示唆された。手根管症候群では、器質的变化に加え、膜電位の脱分極側へのシフトが、Na チャネルの不活化をもたらし、伝導遅延・ブロックを助長している可能性がある、と考えられた。

7. 舞踏運動と顔面口舌ジスキネジアを呈した Chronic Acquired Hepatocerebral Degeneration (CAHD) の 1 例

三宅英理, 平野成樹, 鈴木淳也
川口直樹, 榎原隆次, 服部孝道
(千大)

症例73歳, 男性。経過3年半にわたる変動する意識障害と徐々に悪化する不随意運動を認めた。不随意運動は上下肢の舞踏運動と顔面口舌ジスキネジア, 羽ばたき振戦を呈した。腹部エコーにて, 門脈-大循環シャントを検出。ラクツロース治療を行ったところ数日後より症状改善がみられ始めた。本症は不随意運動を呈し, 治療により軽快した Chronic acquired hepatocerebral degeneration の 1 例である。

8. AIDS に合併し MRI で特異な病変を示した脳症

小林 誠, 根本有子, 伊藤彰一
北野由紀子, 川口直樹, 服部孝道
(千大)

55歳男性で経過8年の AIDS 患者。薬剤性糖尿病のため抗体 HIV 薬を減量していた。H13年末, 右上下肢の小脳性運動失調が出現。頭部 MRIT2WI で右中小脳脚から歯状核付近に浮腫や増強効果を伴わない高信号域がみられ, 徐々に小脳白質全体に拡大した。PML, HIV 脳症, IML が考えられたが確定には至らず, HIV, トキソプラズマ, 真菌などに対する診断的治療にも反応せず, 経過7ヶ月で寝たきりとなり死亡した。

9. 脳内に多数の石灰化を伴う結節像を呈した 1 例

早川 省, 柏戸孝一, 新井 洋
(川崎製鉄千葉)

1ヶ月間の抑鬱症状, 全身倦怠感の後に急性の軽度の意識障害を呈して入院した55歳男性。画像上多数の石灰化を伴う球状結節を大脳から小脳, 脳幹にかけて認め, 2ヶ月程で結節はさらに腫大した。特異的な画像所見についてウイルス・細菌感染・結核・寄生虫感染, 血管腫, サルコイドーシスなどの肉芽腫, 悪性リ

ンパ腫・腫瘍等による結節と比較検討した。最終診断として, 頸部リンパ節の生検を行い, 肺腺癌と診断した。

10. くも膜下出血で発症した Intravascular Large B-cell Lymphoma

和田 猛, 古口徳雄, 八木下敏志行
(千葉県救急医療)
渡邊義郎 (同・脳神経外科)
川名秀忠 (千大・腫瘍病理学)

くも膜下出血で発症し, その後, 脳梗塞と痙攣を繰り返し, 2ヶ月後に死亡した54歳男性の症例を報告する。頭痛, 発熱, 意識障害を主訴に来院。腰椎穿刺にて血清髄液を認めたが, 脳血管撮影では明らかな異常血管は認められていない。意識障害は, 一見ヒステリーを思わせるような波があった。画像上, 進行性多巣性の脳梗塞を示した。病理解剖にて Intravascular Large B-cell Lymphoma と診断された。

11. 髄液中細胞数異常が遷延した辺縁系脳炎

牧野隆宏, 伊藤彰一, 鈴木浩二
榎原隆次 (千大)

8ヶ月の経過で近時記憶の障害と易怒性, 全身性間代痙攣発作を認めていた。入院時, 近時記憶障害, 衝動性眼球運動, 左注視方向性眼振, 左上下の肢軽度の小脳性運動失調を認めた。検査の結果, 髄液細胞数増多と MRI で両側扁桃体に異常信号を認めた。傍腫瘍性辺縁系脳炎が疑われ検索を行ったが, 確定診断には至らなかった。

12. コクシジオイデス髄膜脳炎

中田美保, 吉川由利子, 石川千恵子
伊藤彰一, 片山 薫 (成田赤十字)
長谷川裕三, 五十嵐琢司, 中村道夫
(同・脳神経外科)
亀井克彦 (千大)

症例は37歳男性。米国のコクシジオイデス流行地に在住中, 原因不明の肺炎を呈し, 帰国後高熱・頭痛・嘔吐で髄膜脳炎を発症した。血清・髄液中の抗体価上昇によりコクシジオイデス髄膜脳炎と診断された。MRI で脳底髄膜炎・膿瘍・水頭症を呈したが, AMPH-B の静注・髄注により改善傾向にある。しかし細菌性脳炎など合併症の治療が難航している。